

主体的学習法を身につけ、自己教育力を高めるために
 —「臨書」の場合を中心に—

久米 公（東邨）

1. はじめに

久米でございます。ご懇切なご紹介をいただき恐縮しておりますが、私にとっては里帰りという思いです。それだけに非常に懐かしいというか、嬉しいというか、あまり緊張も覚えなまま今日伺いました。伺って先生方のお顔を拝見させていただいても、みんななじみのある方ばかりで、こんなところで何年も過ごさせていただいたと思うと、ある種の感慨がこみ上げて参りました。

今日は皆さんに一時間ばかり話をといること。伺いましたところ、学部的一年生から博士課程の研究者まで、幅が随分広いということはどうしたらいいか、しばらく考えてみました。そして、田中裕昭先生もおっしゃって下さったように、みなさんが日々やっておられる、例えば臨書の学習活動についてそれぞれの人が普段やっていることを、手順ごとに必要なことを見定めてここでやるべきことは何なのか、そのやるべきことはどういう意味を持つのか、そういうことを教育研究的に考えてみるとどうなるのか、ということをお願い申し上げたいと思ひ参りました。そう申上げると学部的一年生の方は、そんなのは格別意識しないでやってしまっているよ、ということだろうかと思ひます。そういう何気なくやっていることと、その中にあるものの一つ一つを立ち止まって考えてみよう、そしてその意義を捉えてみよう。そして時間が無い時にはこうする、時間がある時にはこうしたほうがいいよ、そう把握をしてもらえようになれば一番うれしいな。そして、大学院の皆さんには普段何気なくやっていることの中にあるものを冷静に捉えていくところなる。その活動を理論的に位置付け、解明し、それらを他の活動と総合してつないでいくと、どういう位置に、どういう役割を果たすものとして捉えられるのか、書の学習の全体を体系的に捉えていこうとする時の捉え方の参考にしていただけるかな。そんな思いで今日、一時間ばかりお話させていただこうと思ひます。

2. 本内容と、私の日常授業

さて、お手元の資料は、文科省から中学校・高校の先生方のためにというので『中等教育資料』が出されていますが、平成九年の九月に「学び方を身につけ、自己教育力を高めるための教科の指導」という特集をした時に、書道の側から言うとうなるのかということ、本学の教員をしている時に書かせてもらったものです。本学の学生諸君に、今から申し上げるようなことを授業の中であるいは申し上げた年もあったかなと思います。今、四国大学の学生諸君にも授業の中におろしたりしていますし、院生へは「書道教育学特論」の一部としても講じています。後で聞いてみると他の先生方がおっしゃらないような捉え方、見方があって、ハッとさせられることが多いということ。おととも院生の方が聞かせてくれました。「大東大の皆さんに共有という形で受け止めていただければ嬉しいです」と、言ってくれましたので、お墨付きをいただいた思いで今日やって参りました。以上を前置きにして、おしゃべりさせていただきます。

3. 書道の大枠と臨書

資料の第一頁の右側、上の段から下の段にかけて、私たちが書の研究の中で取り組んでいます「臨書と創作」、それは書の中では車の両輪のような関係で、必ず専門的にやる者は関わっていくものです。書の分野には「漢字の書」と「仮名の書」と「漢字かな交じりの書」があるけれども、「漢字かな交じりの書」には臨書は今のところ直接見据えられていない。漢字の書、仮名の書には臨書、そしてその対照的なところに創作があつて、臨書は無くても書の研究はできるけれども、臨書を位置付けることによって書の学習が確かなものになっていく。専門的にやろうとするとはずせない、そう意識しながら、一頁目の上の段と下の段を書いておきました。それが「一、芸術科書道の大枠と「臨書」」と掲げておいたところです。

4. 臨書の伝統的方法と改善の視点

次に下の段、「臨書の伝統的学習活動過程の問題点と、改善の視点」という見出しのもとに、臨書の活動の伝統的な手順を示しておきました。「資料一」みなさんは先生方から臨書はこうやっていくといいんだよ、と教わっている、あるいは高校の時に既に手ほどきを受けてきていることかと思えます。

その臨書を授業として展開していくとする時、通常、その下の方に「資料一」として示した、①から⑧のような手順で授業されることが多いと思います。これが一流れの五〇分あるいは一〇〇分の授業の中身であり、これが二回分、三回分で一つの単位を構成されるということもあるでしょう。臨書の授業の場合、まず、①から⑧のようなプロセスがその中

に組み込まれているだろうと考えます。こういう臨書の学習手順、授業手順を通して、伝統の継承だけではなく、新たな啓発や開発、あるいは個性や創造性の育成をめざし、伝統の生成発展へとつながるよう図っていく、これが教員として授業を進めていく場合のあり方だろうと思います。それが授業の本筋であると考えます。

〔資料1〕『中等教育資料』掲出

自己学習法獲得を意図した 「臨書」の授業過程

① 学習動機の形成

② 対象の性情感受（直観的鑑賞）

- ・ 一対比較鑑賞法等による良さ美しさの感性的把握

③ 良さ美しさを支える技法・理法 of 理解（分析的鑑賞）

- ・ 分析的鑑賞による理法・技法の具体的解明
- ・ 既習事項と未習事項の弁別 技法獲得法 of 理解や予測
- ・ 課題解決意欲の高揚 意図・目標の鮮明化

④ 試書（一枚臨書）

- ・ 意図に基づく初書き 試行への集中

⑤ 試書の検討

- ・ 試書にみる自己の今の姿の直視
- ・ まず、この時点での達成点の確認を第一に
- ・ 次に、②③と照合し、問題点の焦点化と解決法 of 確認を
- ・ 練習（自己改善活動）のための指標や課題の自覚

⑥ 練習

- ・ 設定条件下（時間や枚数）での自己改善活動 of 遂行
- ・ 課題解決への集中 改善意識の持続

⑦ 中間まとめ

- ・ 練習に区切りをつけ、一枚だけによる中間浄書

⑧ 中間まとめの検討

- ・ ②③⑤との照合による、第三者的な冷静な自己点検
- ・ まず、向上点を確認し、自己実現の喜び of 実感を
- ・ その上で、未解決点の焦点化と、解決法 of 再確認を

⑨ 再練習

- ・ 設定条件下での、未解決課題への再挑戦
- ・ 一層の気力の充実や意欲の高潮を

⑩ まとめ

- ・ 一枚だけによる浄書④⑦との比較に有効
- ・ 二〜三枚による浄書⑧成果 of 定着度 of 見定め to 有効

⑪ 成果の点検・評価

- ・ ④⑦との比較・点検 成就点を確認し喜びを心に刻む
- ・ 残る問題点を確認、活動を締め括る
- ・ ④⑦⑩を保存（次回の自己学習の出発点に）

⑫ 成果の転移・発展

- ・ 他字への適用や応用法 of 想定

〈因襲的臨書活動の問題点〉

ところが因襲的な「臨書」活動においては、とかく、当該古名跡の書道史的理解と技法の追隨に偏ることが多い。とかく、私どもそんなことをやりがちだなと自分自身反省させられることが多い。対象の価値の一方的指導、もしくは受身の物真似意識による反復的技法実習に終始しやすく、一人一人の感性を磨き鑑賞力を高めるという視点がとかく忘れられやすい。技術だけの追隨に終わりがちです。

①感性の陶冶の重視を

考えてみますと、感性の陶冶を忘れた知識・技能一辺倒の書道授業は、専門家養成のためのある目的のもとに行われる鍛錬の場ではそれらも必要だということもあるかと思いますが、高校の一般教育における「芸術」教育としては、そういうやり方だけだと意義の大半を失ったものになってしまう。高校の場合、授業は普通専門家養成という形で進められていません。書道の愛好者を育てるということを進めている。その中で、今申し上げてきたようなあり方をしていくと、そっぽを向いていく高校生がたくさん出てくるだろうということです。

②それは、主体的対応によってこそ磨かれる

感性というのは、主体的対応によってこそ磨かれる、受身の中では磨かれにくいと考えます。従って、それになかった臨書の学習指導にしていくには、先ほどあげました「資料1」のプロセスの各①から⑧にあげたことを学習者ごとの意図的、能動的な、その気になって関わっていくというあり方の中で進められるようにしていかないとはいけません。わけても②知的な理解鑑賞、あるいは、③技法の解説のところを、学習者の主体的鑑賞活動の中で展開されていくようにしていく。そのことが②、③の過程に続く技法獲得活動をも主体化していくし、後に触れる「資料3」のように、創作及び鑑賞の学習活動とも有機的・効果的につながっていくようになる。そこがきちっと意図的に意義を持つことになっていくんじゃないか、そう常々思っております。

③技法伝授的臨書指導からの脱皮を

三番目に、技法伝授的「臨書」指導から、主体的「臨書」学習へということ。ここは高校の先生方への資料として書いたものだということから、指導者の立場を出させてもらっております。そのところを学習者の立場に立って考え直してい

くことが大事なんですよという気持ちで示しました。

「臨書」は、古名跡という文化的価値に触発されて、自らの心と手で主体的に価値に立ち向かっていく行為だという言い方をすることもできるでしょう。ところが、対象の評価が見定められていることへの安住からか、とかく、伝授すべき絶対的な価値と捉えて、「臨書」を型の継承活動として考えやすい面がある。「いいんだから習え。古来、こういう風に価値を持つものだからずっと古典として位置づけられてきているんだ。だからだまって習え」と。そういう意識付けで臨書活動に入っていくことがよく見られます。そういう上から下への押しつけの形にしないで、本人の思いがそう持てるようにしてとりかかっていく、それが大事なんです。それはあり方によって可能なんだということ。そのところをやっかいがっている。時間がかかるから、とやかく言わないでこう思っただけでいいんだと、そんな安易な、直線的な結び付けで、すぐに臨書学習に入っていくこうとする。そのところを考え直してみようということです。こういう考え方で、授業の中にある色々な手順、すなわち学習指導過程というのは、指導者側からみると先生の指導の手順であるけれども、学習者側からみると、学習の手順なんです。だから、授業を通して「学習の手順」をきちんと学んでいくようにする。そういう意識が持たれるようにしていきたい。そこが往々にして忘れられている。これは書道に限りません。

例えば、国語の授業でも、読書指導ということで、読書のあれこれを単元化してやっていこうとする。その時に、本の中の興味をひく文章を、とかく受験のためにこと細かに分解して扱っていこうとする。読書指導しながら、かえって読書嫌いを作っていくことになってはいはないかということです。せっかくの授業が読書愛好者を育てるということにならないで、卒業したら週刊誌しか読まないということに往々なってしまうている。

書の場合も、せっかく臨書の授業を展開しながら、卒業後、「あの時にやった、あの古典の臨書が楽しかった。自分は書に専門的に入っていくこうとするわけではないけども、あの臨書学習は卒業後も続けていきたいな」という時に、あの臨書の活動法が蘇らないで、「どう習っていたんだっけ。じゃあ先生、また教えてくれますか？」というようなことで先生のところへ行こうとする。そうするとある先生は、「おう、卒業したんだから今度は月謝を持ってこいよ」などというよくな言い方になって、「えー」と、出鼻をくじかれて、「じゃあ、もう辞めた」ということになったりする。そうではなくて、「好きでやるのか、じゃあ授業ではどういう手順だった？あの時に君はこんなこと言ってくれたね。あの順序でやっていくといいんだよ。一人でやっていっていいんだよ。上手、下手ではなくて好きでやるんだったら、どんどん続けていこうじゃないか。時々持ってきて見せて下さいよ。今度は仲間としてやっていこうよ」と、そんなことが言えるようになっていく。あるいは、先生の所へ相談に来なくても、自分でやった成果を「先生、この頃、教わったあの方法でこうやってい

ます、ちよつとみて頂けますか？」などということになって、嬉しいなということになっていく。そういうことにならないで、どう臨書していいのかわからないということから、それつきりもう筆を持たないということになりがちではないでしょうか。では、授業の手順を、「学習の手順」として受け止めて、その中身に対して色々な意味を考えるようにしていくとどうなるのか、ということ、で、「自己学習法」獲得を意図した「臨書」の授業過程に入っていきます。

5. 自己学習法獲得を意図した臨書の学習指導過程

以上の考察に立ち、「資料1」を基にして、「臨書」の「自己学習法」獲得を意図した授業過程「資料2」を例示します。①から⑩まで、学習法のプロセスということを立ててみました。そして、それぞれのプロセスの中で、考えるべきこと、中身にあたることを要点だけを挙げておきました。ここでは、パソコンを使って①から⑩までに位置することを具体的に例示します。皆さんが普段やっていることと思ひ合わせて、一緒に考えていければいいなと思っております。

まずパソコン画面の一番初めの授業法と学習指導法。これは、今さっき前置きの部分で申し上げました。二番目の学習指導過程。授業のプロセスと学習過程。これは、指導過程と学習過程という言い方をすると裏腹の関係になります。そういう中で基本的学習指導過程というのはどうということになるのか。基本になる学習指導過程つまり授業の過程、どの分野の授業にもこう仕組むと授業は一応成り立つよ、という手順が一応あります。それは教員免許を取るための授業の中で、こう仕組むと臨書の基本的な学習指導ができる、創作の場合はこう進めるといいよ、という授業のプロセスが扱われます。それらを見据えるとどうなるかは後に触れる「資料3」の中にあります。

6. 臨書の基本的学習指導過程と、

基本的自己学習法の抽出

では、授業のプロセスから自己学習のプロセスを抜き出し

〔資料2〕

〈単位教材の30分による自己学習法〉

(1) 対象の擬視	1〜2分
(2) 試書	(1枚) 2分
(3) 試書の検討	2分
(4) 練習	(4枚) 10分
(5) 中間まとめ	(1枚) 2分
(6) 中間まとめの検討	2分
(7) 再練習	(2枚) 5分
(8) まとめ	(2枚) 4分
(9) 評価、転移応用法の想定	1〜2分
合計 (10枚)	(30分)

てみよう。そういうことで抜き出したのが「資料2」の①から⑩までということになります。では①から⑩までの各プロセスと、各過程の要点を申し上げるとどうなるのか。

①学習活動の形成

まず①学習動機の形成をあげました。これは授業の場合は、学習動機の形成、いわゆる今日の授業はどういうことを目指してやっていくのか、意識付け、意味付け、学習者に「今日はどういうことをやろうとしているな」ということです。これが、授業では必ず必要になってきます。いきなり入っていくと、なんだか最初からおもしろくないということ、すぐに居眠り体勢にはいつてしまいます。自己学習の場合も大切です。

②対象の性情の感受

その次、②に対象の性情の感受というのをあげてあります。まず、対象をよく見るということ、とかくこれを忘れがちです。「今日やるのはこれか」ということで、すぐに、第一筆、第二筆と臨書をしていく姿がよく見かけられます。まず、今日やろうとするもの、その全体をよく見るということ、四字教材であれば四字全体を見渡して、ということ、これこそ技法獲得のための学習活動の土台だと、私はこう言い方をしたいと思います。しかも「深く見る」ということ、「凝視する」ということです。ただ見るのではなく、深くじつと見つめ、そこにあるものを探り出すということ、私にはよく学生に一分間じつと見て、色々な情報をここから探り出そうじゃないかと言う。すると、二〇秒もすると、ゴソゴソしはじめます。「もう先生書かせてよ」と言うので正してみると、あまり見ていない。具体的に取るべき情報が捉えられていないということ、一分間じつと見入って、必要な情報をきちんとえぐり出すということ、これはある種の苦痛を伴う活動だということ、その苦痛をおして、如何に見るかが、その後の主体的自己学習過程を左右していくこと、この見入る中で、何をどういう風に見てとるのか、そのところを授業の中では紙に書いてもらったり、口頭でやりとりをしたりして、色々切り口を設定し触れていく。つまりは授業の中で、何をどう見ればいいのかということ、何を扱うわけですが、そこをじつと見入るための楔だと捉えないでいることがよくある。そのことを「感性的な情報把握」の言葉を使っておきました。その対象が持っている性情、趣、良さ、美しさ、どんな感じがするか。ちよつと変わっているけれども、どう変わっているのか。すつきりとした方か、重い方か。どんな言葉でもいい。あるいは言葉にしないでもいい、とにかく対象の持っているものをまず受け止めるということ。専門用語で言うならば「直観的鑑賞」ということになるでしょうか。

③ 技法情報の分析的把握

その次に、技法的情報の把握について。第一次の直観的鑑賞で受け止めたその趣が何によってもたらされているのか、それを探り出していく。そこにひそんでいる技法の分析を進めていきましょう。

分析的に見ていこうとする時に、例えば全体から部分へという一つの見方を知っておく。これは大事なことだと思えます。これが絶対という訳ではありません。人によっては目立つところからという言い方をされる人もいます。目立つたところからということになると、見落としということがある。だから、手順の一つとして、「大から小へ」をここではお示ししておきます。A全体の構成、B字群、C字形の構成、点画の構成、用筆、運筆、あるいは、趣を支える用具材はどういうものが適切か、そんなことも考えてみておくようにする。感じ取ったものをどういう風にしたら実現できるか、解決できるか、それをくつきりさせていく、それが問題解決意識を鮮明にするとしておいたところです。その解決の際に、まず、a.すでにこれまで身につけてきている、授業で習ってきている、あるいは今までの臨書活動でわかってきていること、それらを思い出し、ここにどう適応できるかということを考えてみる。次に、b.まだこれまで体験していないな、学んでいないなということは何と何かを確認し、それらを表現し実現していく場合にどうしたらいいか、どうしたらできそうかなという予測を持つということです。それは言い換えれば、「学習意図、活動目標を明確にする」ということ。こういう思いをきちっと持つようにしておいて、以下の活動に入っていきたい。それが初めに言っている主体的活動ということになっていくわけです。

④ 試書Ⅱまず、一枚だけ書いてみる

次に、今確かめたことを基にして、まず最初の一枚でどうか試しに書いてみる試書。一枚だけで書いてみるということです。先ほど固めた意図に基づいて初めて書いてみる。ところが、第一筆を書くと、「こんなはずじゃない」第二筆を書くと、「まてよ、もっとできるはずだ。」第三筆を書くと、「こんなはずじゃなかった。」ついクシャクシャ、ポイッとやりたくなる。そして、もう一枚書いたらまたできない。そういうことになりがちになる。最初の一枚というのはそういうことがいたるところに現れるものだど悟っていて、とにかく一枚だけ、こうありたいと思っていたことを全部やってしまうことです。最初の試行でどの程度意図が実現できるのか、これをはっきりつかみたい。初めの一枚に集中し、書き通す、このことが肝心です。最初の現実をしっかりと捉えようという意識でまずやってみる。その一枚に筆者の今の姿が端的に現れると心得ていよう。不満でも決して書き直しは禁物なんだということ。しかもすぐ、書き直しに入りたくなる。

その書き直しはもう次のプロセスに入っているということ。いわゆる練習、練り直し、練り習うということに入る訳です。そこに入る前にやるべきことがありますよということ。書き通して、そこに出てくるさまざまな不満、これを次の活動エネルギー源として、持ち込むようにしていきたいということです。

⑤ 試書の検討

やるべきことは、最初の一枚に現れる自分の現実を分析し、検討しようということ。試書にみる自己の現実を目をそむけないで直視することです。

さきほど、まず初めに対象の鑑賞、それから、よく見るということをやりましたが、それらとの照合による試書の直視をまずやってみよう。その時にまず、長所の確認をすること。その段階で「ここはうまくいつているぞ」という、それを認めましょう。まず、やろうとしたことが第一枚目でどんないい姿で出てきているかをまず確認しよう。現時点での成就点の鮮明化を図ることが大事です。それこそが「善を認める目」を養うことの原点なんだということです。お互い、とかく人の粗探しはやりたがる。自分のことについても粗が目についてしょうがない、だから嫌になるんです。嫌にならないよう、自分自身であれ頭を撫でてやりましょうということです。そういう習慣が人間関係、友達の良い点を認めるといふそういうことにつながっていくはずですよ。ところがとかく、こういう臨書の場合、先に粗探しをやりたがる。それは練習を継続していくことに大きなマイナスを生むことになりますよと、私はそう言いたい。

その上で、初めにやった「よく見る」ということに照らして、自己の問題点をくつきりさせていく。良いところは良いとして認めている訳ですから、では問題点はどうかと、問題点をくつきりとさせていく。その上で、その問題点の解決法をぐっと引き寄せていく、その際、既に身につけていることと照らしあわせて、解決策を具体的にくつきりとさせていくようにしていく。

こういう風にして自己改善の目印、目標、これをはつきりするということが、課題解決意欲を高めるといふことになるし、次の練習という活動を意識的、意欲的にさせるといふことになる。

⑥ 練習

次に練習。練習というのは文字通り練り習うということ。問題点の解消と、能力化のための反復実践活動ということになります。ここで大事なことは解決意識と集中力の持続及び気力の充実ということが大事です。すぐ嫌になってくるとい

うことがままあるでしょうけれども、練習活動を続けていく中で、ずっと持続されていくように心がけないといけない。これを例えば授業の中で考えると、初めのころはこの辺ですぐに騒がしくなっていたのに、書き浸るようになってくる、それはやることはつきり受け止められ始めたということ。こうなっていけないといけない。自己学習であっても、課題解決を求めてひたすら意図的反應実習へと進めていきたい。

集中力、粘り強さの発揮、自己解決の苦楽の体験の場として、自己解決の苦しみと喜び楽しみを味わう。これがこの中で絶えず大なり小なりないまぜになって出てくる。苦しい時に「これはまだできない、もう一回、もう一回」ということで、練習を進めていく。「できたぞ、嬉しいな。これをいつもできるようにしていこう」という思いが、ここでは繰り返す味わわれるということになる。そういう体験の場だと捉えたいと思います。

⑦ 中間まとめ

次に、そういう練習活動がある段階に至った時、中間まとめをします。授業に当てはめて考えるならば、「この辺で一度まとめてみるか」ということになると思います。「ある段階で」というのは、例えば、ある種の「壁」を感じ始めた時。壁というのは、例えば、「今日、このあとどこ行くんだったつけ」とか、「さっきいろんなことがあったけどなんだったかな」「友だちと約束したこと、なんだったかな」とか。あるいはタバコの好きな人は「ちよっと一服したいな」「お茶にしたいな」「トイレに行きたいな」そんなことが頭をよぎります。これは「壁」を感じ始めている時です。あるいは活動がマンネリ化した時、良いか悪いかがわからなくなってきた時、あるいは成果が低下し始めたような時などと、いろんな形で「壁」は現れると思います。そういう時に、もうあまり押しつけないでここで区切りをつけてみる。一枚だけ書き上げてみようという訳です。

一枚としておきましたが、試し書きも一枚にしておきましたので、ここでも一枚だけにします。不満があっても書き直さない。「区切り、はじめをつける」ことこそ、自己学習継続の秘訣だと心得ましょう。不満があつて書き直さない。さっきできていたんだからともう一枚書いてできなかつたらどうする。「えー、さっきのはまぐれか」ということになってしまふ。そしてこんなはずじゃなかった、もう一枚書いたらできない。「結局能力が無いのか」「親のせいなのか」などという言葉を使い、人のせいにしたくなる。そういうことにしないで、「ここは一枚だけ」と、区切りをつける。そういうことにしておく訳です。平素の自己学習では、そういうはじめをつけながら、次のプロセスに入っていくようにします。

⑧ 中間まとめの検討

中間まとめの検討に入っていくみましょう。先ほどの検討、よく見るといふことと思ひ併せて、第三者的にチェックをします。その際にも、全体から部分へといふ、さつきと同じような見方を一つの例として持つていと抜かりが無くありません。ここでも、まずやはり向上点を確認し、「自己実現の喜びを心に刻め」といふこと。よくなるうとしたあの練習活動が、こういう形で実つてゐる、それをまず確認しよう。その喜びを味わつていくことが、練習活動が続けられるコツといふことになります。

その次に、未解決点を具体的に抉り出してみよう。その上で、その解決法を割り出していくと、残つてゐる問題点はどこだ、どうしたらいいかといふことに絞込みがなされやすくなつていきます。その時にうっかりミスか、未熟か、理解不足かを弁別しましょう。うっかりミスといふのは、さつきまでできていたのに、「ついついっかりやつてしまった、これはすぐできるあれだったんだ」といふことで、それはそれとして確認をしておく。未熟だといふことになると、「まだこなされてゐないな、さらに本腰を入れないといけないのか」といふことになるし、理解不足といふことになると、「あれっ、これがわかつてゐなかつたか」といふ風に弁別していく。次の活動が意識的に行われやすくなつていく訳です。

解決点を鮮明にして、解決法を再確認して次の練習活動に入れるようにしていこう。それを、再練習としておきました。

⑨ 再練習

ここは、未解決点解消のための最後の自己改善活動の場といふことです。練習といふのは自己を良くしようといふ、自己改善活動といふこと。この段階での問題点は難度が高いのが普通だと知れど心得ておきましょう。残つてゐる問題点は難しい。だからその氣になつて立ち向かつていかないと、すぐにできるといふことにならないと知つてやつてゐることが大事だといふこと。高密度の集中力と根氣が必要です。だからじっくりと腰を据えて書き進めようといふことです。

併せて、そういう中で、既にさつきはよくできてた、と思つていたようなところは定着させ、能力化を図つていく。これがこの再練習の所です。あるいは、それは除いて未熟点だけを取り出してやつていくといふやり方も良いでしょう。

そして、時間がある時には⑥⑦⑧の過程を繰り返す。後で、三〇分だとか、一時間とか、二時間とか、いろんな条件に合わせた学習法といふことを申し上げますが、単位時間の中でも、時間のある時には今まで申し上げてきた練習、中間まとめ、その点検、これを繰り返していくといふことです。それが、緊張の中での自己改善活動だといふことです。難度の高いものの克服にあたる改善活動だといふことを心得ていこう。

なお、こんなことも付け足しておきます。この段階で第三者の目が入ると効果的だということ。この再練習の段階で第三者的な目が入ると、心に余裕がありますから第三者の声を謙虚に受け入れることができやすい。もうこれで終わりだ、でき上がったという時に第三者の目を入れるよりも、こういう時に考えると非常に効果的に受け入れられるということになるでしょう。

⑩まとめ

その次にまとめ。ここでは、これまでずっと続けてきた活動の成果をまとめてます。

その時に一枚だけでまとめる、これも一つの方法です。それは試書、中間まとめと同じ条件だということ、その一枚にそれぞれのプロセスで実現していたものがどうなっているか比べやすいということです。「一枚目でこうあったものが、中間まとめでこうなった。この最後のまとめのところでもこうなった。良いところはやはり良いとして定着しているか。問題は最後のところではこんなに変わってきたぞ」あるいは、「少し問題点はあるけれども、良い調子だぞ」そういうことを見届けるのに一枚だけというのは、ある場合、有効に機能するでしょう。

あるいは、複数枚書く。二枚か、三枚か書くというのも良いでしょう。それは定着度の見定めにも有効だということになります。三枚書いたら三枚を横に並べて、「これが一番良い。これとこれはここに問題点があるけれども、こうなってきたということ、今までになかった向上点だ」という確認もしやすいでしょう。

多すぎると逆効果ということもある。四枚、五枚と書いていくと、並べてみてまだできていない。じゃあもう一枚ということでもまた一枚書きたくなる。その時できなかったらどうなるのかということ。『やっぱ俺は駄目か』ということと自己嫌悪の中に追い込んでしまうことになります。自己嫌悪の中に追い込むと、次の時立ち上がるのにちよつと気が重い。翌日やりかえようとする時に、「昨日できなかったあれをまたやらなさいといけないのか」ということになってきます。ですから、三枚なら三枚にして、これはまだできなかった。次の課題にしようという思いをゆとりとして持てるようにしておいて、次回の活動にとりかかっているようにする。そういう「程よく区切りをつけるということ、これが自己学習継続の秘訣」ということになるだろうと考えます。

とかく、自分を劣等意識の中に追い込んでしまう、こういうことをお互いよくやりがちです。そうなるから、いわゆる三日坊主ということになる訳です。続かないというのは、そういう自己嫌悪の連続だから嫌になってくるからです。だから、自分のことであれ、区切りの都度、自分で褒めてやって下さい、頭を撫で認めてやって下さいということ。」「で

きていない課題はこうだ、こうだ」と、自分で自覚できている訳ですから、ただ褒めるわけではないし、そういう区切りをつけながら続けられるようにしていきたいということです。

⑪ 成果の確認と反省

a 試書・中間まとめ・最後のまとめの見比べによる確認

そのあと成果の確認と反省。ここをお互いとかく忘れがちです。「試書」「中間まとめ」と、「最後のまとめ」との見比べによって成果を確認していく、それがこの段階です。ここをおさなりにすすすことが多いいけれども、一連の活動と思いを合わせながら比較鑑賞をしましょう。

ここでもまず達成点を確認しましょう。三つを並べると達成度というのはよくわかることになります。充足感、満足感をこの時点なりに味わっておくということです。さっきも申し上げたように、これが継続のコツということになってきます。それから、この段階での未解決点は潔く次への課題にしていきたい。これをさっき言ったように、「もう一枚やってみよう」ということでまた書こうとしないこと。挫折感をまた大きくしていくことになりやすい。

b 高まるほど問題点も高次元化する

力が高まるほど問題点も高次元化するのが常だと心得よう。「今日やったこと、変わるのとは変わったんだけどちょっとしか変わってないな」ということがよくある。しかし、ちょっとでも変わっておれば、そのちょっとの価値を認めることのできる目も持っておきたい。

このちよつとがどれだけ大事かということ。例えば、顔真卿の『争座位稿』の中に、「百里を行くに九十里を以って半ばとす」そんな言葉がありますね。『争座位稿』を臨書した人、思い出しませんか。あるいは、芥川龍之介の『侏儒の言葉』の中に「百里を行くものは九十九里を以って半ばとす」という一文があります。先程のわずかな違いというのは、顔真卿の言う十歩の違いなんだけれども、その十歩は九十歩にあたる十歩なんだ、ということなんです。あるいは芥川龍之介の場合で言うならば、九十九里にあたる一里なんだということ。そのわずかな価値の大きさは九十九里とイコールだと、そういうことがわかるお互いになっていかないといけないと思う。そういうことがわかっていると子供の成果、結果を云々しようとする時に、「こちよつとしか良くなっていないと君は思うかもしれないけど、このちよつとというのは大変なことなんだよ。芥川龍之介の言う九十九里にあたる、それなんだぞ」こんな褒め方ができるのとできないのとでは大違い、

ということになってきます。問題点がしだいに高次元化していくということも常に心得ておきたい。

c 試書、中間まとめ、まとめは一綴りにして残そう

それからまとめは、試書、中間まとめと一綴りにして残しておきたい。何のために残すのか。次の日の練習はこの三つを見比べて、「昨日はここがこうだったんだな」と、それを練習活動のスタートにしていくためです。そこに位置付けて「ここまで来ているから、今日はここからスタートだ」という思いが持てるようにしていく。そのことが大事だと思います。

d 何らかの充足感こそが次の活動の源泉

また、何らかの充足感を持つことこそが次の活動の源泉、継続のコツです。これはこれまで何度か申し上げて参りました。

e 転移発展を考える ― 獲得した成果の転移法の想定を

獲得した成果の転移法の想定を最後に、転移発展を考えるとということ。獲得した技法が他にどう生きるか必ず想定する習慣をつけていきたい。日々の練習活動、臨書の練習というところで取組んでいる活動であるにせよ、必ず、今日やったことはどういふところにどんな風に生かすことができるのか思い合わせてみよう。どんな字にどう適用できるか、どんな表現にどう転移が図れるか、この想定体験、思い合わせ体験が次の活動に意識作用をもたらすということになる。以降の活動に、あるいは普段の硬筆による書写などの中にも蘇って、生かされるということになるだろう。「あの時、こうだった。思い合わせをしたあのことがここに生きるんだな」と蘇るようになると、それはいろんなことに進歩をもたらしてくれることになっていく。これこそが能力化、日常化、想像力、創造力育成の鍵である。いわゆる「臨書から創作」へとこの時これが大事な役割を果たしていくことになっていくはず。ところがそういう大事なプロセスである「想定」ということをやらないで、「今日はこれで終わり」ということで終わってしまうことがよくあります。最後に警句的に「発展や運用につながらない能力は真の能力に非ず」などと書いておきましたが、まさにこういうことが言えると思います。

7. 自己学習法から自己教育力の育成へ

最後に、自己学習法から自己学習力、自己教育力の育成へと、示しておきました。以上のようなプロセスと、そのプロセスの中にある要件を、例えば三〇分の中で半紙十枚で活動を展開するとして「単位学習材の基本的自己学習過程」として見定めてみるとどうなるのか、それが「資料2」「三〇分による自己学習法」ということになります。

〈基本的自己学習法〉

「自己学習力の育成こそ、書道授業の基礎・基本」としました。これは授業を考える時、それからまた、申し上げてきている、自己学習を毎日自分で心がけていこうとする時、その手順と各過程ごとの要件について、所要紙数と時間を具体的に提示したものです。今までたどってきた各プロセスを、ここでは「(1) 対象の凝視」、「(2) 試書」から、「(8) まとめ」へと項目立て、そして最後に、「(9) 評価、転移応用法の想定」、と示しておきました。プロセスの数は違っているかと思いますが、要点はドッキングさせるなどしてあげています。各プロセスに三〇分という時間と、十枚という紙を持ち込んで考えてみるとどうなるのか、ということなのです。

(1) 対象の凝視

対象の凝視、これをまず一〇二分としておきました。授業で一分間じつと見て情報把握をというと、多分、二〇秒か三〇秒ぐらいで「先生早く書こうよ」と言い出す。「一分たちました。はい、書きましょう」というと、一面ずつ見比べながら左のものを半紙に書き写すということになる。結局、必要な書字要件をきちつと頭の中に入れていないから不安になってつい何度も作例を見てしまう。不安を押してとにかく書き通すことです。そのことによって、見てとったものが頭の中に入っていくという訓練ができることになっていく。ところが、とにかく隣にあるものを見ながら書いていけば良いと、そういう活動をやりがちですね。頭の中に能力として蓄積されていく、蓄積されたものが腕を通して表現されるということになり、にくい活動にしまっている。

そういう活動にしないで、この三〇分に各時分と紙数を当てはめて進めてみると、最初の「対象の凝視」に充てた一〇二分で何をどう見たかということが問われることになる。

これを訓練するためには、例えば方便として赤のボールペン、サインペンを持って留意点を具体的に書き込んでいく、そういうことをやって訓練していくのも一つの方法でしょう。

(2) 試書する

試しに書く、これは一枚二分としておきました。楷書の四字教材は、二分で書けると思いますが。書けないというのは書字情報をよく見てとっていないということですよ。草書だったら四〇秒くらいあればスツと書いてしまうでしょう。

こういう一つの活動に要する時間を自分で見定めているということは非常に大事なことです。これが自己学習を継続していく時に非常に大きな要件になってきます。授業で言えば、試書一枚について、確実に時間設定をして、その中でやれるようなしつけをしていく、それが五〇分授業を無駄の無い形で、極めて充実した有効な展開に持ち込めるということになるはずですよ。そう知っておれば「もうベルが鳴りそうだな、今から清書を」などと指示し、書きかけたらチャイムが鳴って、「早く書いて出さない」などというようなことはやらなくなるだろうと思います。そういう授業を見せられると、「この先生、一つ一つの活動の意味と、それに要する時間、中身の活動の量と質、それらをきちっと想定できないで授業をやっているな」ということがすぐに見えてくる訳ですよ。

(3) 試書の検討

試書に一枚二分、試書の検討二分、これだけの時間が充てられるとかなりいろんなことができます。是非これらは自分で試しにやってみて下さい。

(4) 練習

それから(4)練習、繰り返し習う。これは四枚一〇分にしました。先ほど一枚二分と言いましたけれども、四枚一〇分あれば書いたそばや空いた所かなりの練習ができます。毎日の練習だったら、この程度をやり続けていく、それである程度の成果は得られるだろうと思います。もっと書きたいという人は、三〇分を一時間にしてここの数値を読み替えていけばいいということなんです。

(5) 中間まとめ (9) 評価、転移応用法の想定

少し急ぎます。「中間まとめ」は一枚に二分、(6)「中間まとめの検討」に、また二分、(7)「再練習」二枚。今度は二枚だけにして五分ということにしました。それから、(8)「まとめ」は二枚で四分、そして、最後に(9)「評価、転移応用法の想定」で一〜二分としておきました。これで合計半紙十枚で三〇分です。三〇分あれば十枚の紙を使ってこう

いうことができますよということです。

これを授業に持ち込むと、これだけのことが四五分なり五〇分の授業で普通にできるんです。先生と生徒のやりとりなどがからんで多分、これだけのことが五〇分のことの中味になっているはず。そういう想定ができる人でこそ、授業のプランがきちつと成り立つし、何よりも、その中で自己学習として問われることの要件をきちんとおろした授業になっていることだろうと思われれます。

8. 自己学習法から生涯自己教育力の育成へ

その「基本的自己学習過程」を運用する方法は、すなわち「基本的自己学習法」であると書いておきました。今まで申し上げてきた、例えば三〇分による基本的自己学習過程を運用する方法というのは、基本的自己学習法として見定めていいでしよう。そして、その見定めた方法を毎日、あるいは機会あるごとに運用していくことができるようになれば、その力は「自己学習力」と呼ぶべきです。それを運用していけるということ、それは厳然とした「力、能力」です。そして、自己学習を運用する力というのは時間的条件、身体的条件。あるいは、精神的な条件、それから物的条件等に応じて推し進めていく力のことです。例えば、やる気でいたんだけど今日は半紙が五枚しかなかった。五枚だったらこのプロセスのどこの部分にどういう意味を持ち込んでどう進めるか、これをきちつと想定する訳です。そういう想定をするための基本的学習過程ということ。基本は運用できないと意味が無い、ということ。いつもこの基本通りやろうとすると硬直化して、マンネリになっていくということです。その時の要件、条件に応じて今日はここから入っていくとか、これとこれとはドッキングさせるとか、これは入れ替えるとか、そういうことを考えるようにする。日々の自己学習にしてもそういう運用ができるようにするために、基本を見据えておきましょうということです。基本しか知らない、それしかできないというのは意味が無いことです。条件に対応させた主体的運用、継続のための個性的工夫や創造的知恵の発揮が問われることになります。そこにお互いの何かがかかってくるということなんです。

そして何よりも、こうした自己学習の継続によって自己改善を進めていくこと、その力は、それこそ「自己教育力」と呼ぶべきです。つまるところ書における自己学習力、自己教育力の育成から、生涯に渡って広く書以外の事柄へと主体的な対応に働いていく、生涯学習力だとか生涯自己教育力の育成へと進めていくこと、そういうことができればこれこそまさしく「書による生きる力の育成」ということになってくる。そう考えるとお互いが日々やっている臨書の自己学習、これは実は本気になって推し進めることができれば、大変な力を培っていく活動になる。そしてそれが他のことに生きる

いうことになる、生涯続く大きな力を培っていくということになるだろう。こうなつてこそ、例えば古人がよく「書は人を作る」などと言つてきている、そこへつながっていくということになるんだと思います。こういう見定めができる、お互いがやっていることをおざなりに考えなくなっていく。臨書ということを考えてきたのですが、これを他の学習活動に適応していくとどうなるのでしょうか。

9. 臨書と鑑賞及び創作の各基本的学習活動との関係構造の把握

最後に「資料3」を提示しておきましょう。これは書の中で行われる臨書・創作と鑑賞と、この三つの活動の各プロセスと要件と相互の関係構造を見定めておこうと試みたものです。一番初めにある、A鑑賞の部分は、左側の臨書における鑑賞の部分からこうつながっていくことになる。だから鑑賞学習は、B臨書学習を有効に進めるために非常に大事になるということが分かります。そして、B臨書の学習は左側にあるC創作のこのところへこのようにつながりますよということ、矢印をだしてあります。そういうことになると、臨書学習は創作の学習のこのところに発展し、生きていくようにするために非常に大事なことなんだということがわかるし、おざなりに臨書活動を進めていくことにしてはならないだろう。また、A鑑賞活動とB臨書活動はこのところでのこのようにつながりますよという、この構造が分かると、書の鑑賞、臨書、創作というのは、まさに有機的な大きな構造体として見据えられることになっていくことに気付く。どれかだけを大事にするなどということは、抜かりをいっばいすることになる。こう自覚してこれから先の自己学習活動を進めていただきたいということなのです。

10. おわりに

こうした関係構造の把握に立って、書道教育の意義と実践理論を体系的に構築していくこと、それが書道教育学ということになります。若い皆さんのこれからの取り組みに期待しています。

早口で喋ってきました。ご静聴ありがとうございました。

